

足立教授の学問について

後 藤 靖

一 は じ め に

およそ、長い学問的営為をつづけてこられた先達の研究の歩みについて語ることほどむずかしいものはない。なぜなら、その営為が長ければ長いほど、その過程での苦悩や思考の変化が多いし、その打開のための人には判らない苦闘が存在しているからである。しかも、その苦闘の様は、けっしてその後の研究成果の中にはそのままの形では現われてはこない。だから、世に問われた論文や著書からは、血をはくような著者自身の苦しみのありようを第三者は知る術もない。したがって、ここで私が足立教授の学問について述べようとするのも、いわば表面をなぞる程度のものでしかないことを、あらかじめおことわりしておきたい。その意味では、足立教授に対しては、この一文はかえって非礼にあたるかも知れない。にもかかわらず、あえて一文を草しようとするのは、足立教授はその人柄通りに学問的にも極めて地味であり、論争の種火となるようなガラガラした論稿を草することを極度にきらわれ、それだけに学界においても地道な存在であったからである。

私が立命館大学に赴任したのは、一九五六年（昭和三一）一月であり、それ以来今日まで二十四年間にわたっ

て、同じ学問領域であっただけに、とりわけ深い交誼を賜わった。それ以前にも、すでに『近世在郷商人の経営史』という著書などで足立教授の名前は存じ上げていた。身近にあつて研究するようになってから、私は足立教授の人柄と学問に引かれた。私が、ここで足立教授の学問を語ろうとするのは、そのような交誼にたいする感謝の念と、同僚や学生諸君の間にもその学問の価値が余り知られていないと思うからである。

二 足立教授の学風

日本経済史や日本歴史の研究には、大きく別ければ二つの流れがある。その一つは過去の史料から日本歴史の発展を史的唯物論の立場にたつて解明しようとするものであり、いま一つは事実そのものを史料に語らせるという立場である。後者は経済史の領域でいえば、従来から社会経済史学派とよばれてきたものである。足立教授の学問的立場は、どちらかといえば後者に属している。

社会経済史学派は、京都や関西ではとりわけ根強い。というのは、社会経済史学派の草分け的存在は故本庄栄治郎、故黒正厳氏であり、この門下の人々、例えば大山敷太郎、堀江保蔵、宮本又次、江頭恒治、松好貞夫といった錚々たる人達が日本経済史、とりわけ日本近世、近代経済史研究の発展を促してこられたからである。足立教授は、故大山敷太郎氏（元立命館大学教授）の直接の薫陶をうけられた一人である。足立教授がいわゆる社会経済史学派の流れを汲まれたのは、そうした学問的出発によるものである。

わが国の史的唯物論、つまりマルクス主義歴史学は、わが国ではほぼ一九三〇年代に出版した。その直後に天皇制ファシズムによって徹底的に弾圧され、やっと研究上の自由を獲得したのは一九四五年度の敗戦後のことであ

る。したがって、マルクス主義歴史学の実質的な歴史は三十五年ほどであるといつてよい。この三十五年間にわが国のマルクス主義の立場にたつ歴史学研究は、原始・古代から近代史の各領域でめざましい発展をとげ、巨大な足跡を残していることは疑いない。そして、そこではさまざまな論争がつきることなくくりかえされている。論争がつきないということは、学問の発展にとって必須・不可欠の条件である。だが、そのさい私もふくめて、しばしば史料の解釈をマルクス・エンゲルスの理論に強引にあてはめようとしたり、あるいはその理論に適合的な部分のみを取り出して適合しないものは遠慮なく切りすていくという恣意性があることは否みがたい。ほんらい、史的唯物論は、歴史的発展の法則に適合的なものも適合的でないものも全体としてふくみこみ、その非適合的なものが発生し存在することをも合理的に解釈する理論なのである。例えば、マルクス・エンゲルスの歴史・現状分析の作品である『ルイボナパルトのブリュメール十八日』（マル・エン全集第八巻所収）や『ドイツ農民戦争』（同上）あるいは『ドイツにおける革命と反革命』（同上）、『ドイツ戦争小論』（同第十六巻所収）、『プロイセンの軍事問題とドイツ労働者党』（同上）などをみただけでも、そのことは明らかであろう。そういう意味では、わが国におけるマルクス主義歴史学はまだまだこれからのものであるといつてもよからう。

足立教授は、マルクス主義歴史学の研究成果にも十分に注意を払いながら、着実な実証主義的研究に没頭された。強引に理論づけるのではなく、事実そのものの綿密な叙述を心がけられた。足立教授の史料調査は徹底しており、微細なもの、あるいは相互に相反するものも必ず取上げ、それぞれを意味づける努力を惜しまれない。例えば、後で述べる『近世在郷商人の経営史』や『丹後機業史』という労作にその一端を見出すことができる。それだけに、教授の諸労作での実証は、人に十分に信頼感を与える客観性をもっている。

歴史研究は、何よりもまず事実をもって語らせなければならない。足立教授は、つねにそのことを心掛け、それに専念されたし、また今後もそうした努力をつみ重ねられるであろう。私のように恣意的な史料選択と解釈の弊をもつ者にとっては、足立教授のこの学風は学ぶに価する学問態度であり、いつも反省を迫られてきたところである。

三 足立教授の業績について

足立教授の業績は、業績一覧が示しているように老大な数に上っている。原始・古代から近代にいたる通史的叙述もあれば、現代の経営者に対する指針を示すものもある。けれども、足立教授の研究の本領は、何といっても日本近世経済史の研究であるといえよう。その近世経済史研究は、おおまかにいえば二つのジャンルに分けられる。いま、公刊された著書によって類別すれば次のようになる。

(1) 近世農村史および農村工業史の研究

これにかんする足立教授の研究は『近世在郷商人の経営史』（一九五六年、雄渾社）と『丹後機業史』（一九六四年雄渾社）の二著に集約されている。前者では京都府乙訓郡神足村の油屋三郎兵衛家の事歴を詳細に分析し、それを通じて幕藩体制期の経済構造とその崩壊の必然性を解明するという手堅い実証が行われている。また、後者では徳川中期以降の丹後機業の発展過程を埋もれた史料を発掘しながら仔細に検討し、農村工業の発展という視点から幕藩体制の解体過程を明らかにしようとしたものである。この二著は、きわめてたんなんな実証分析であり、徳川時代の畿内における商業および農村工業研究にとっては逸すべからざるものである。私も、この二著

の成果は、しばしば引用さしていただいた。

(2) 近世の商家経営史の研究

これにかんする足立教授の業績は、きわめて尨大な数に上っている。著書としてまとめられたものだけをとってみて、『千吉商店の歴史と経営』（一九五八年、千吉商店刊）、『近世京都商人の別家制度』（一九六〇年雄渾社）、『老舗と家訓』（一九七一年京都府）、『老舗の家訓と家業経営』（一九七五年、モラロジー研究所）などがある。これらの著作では、その書名が示しているように、徳川時代の京都における個別の商家の経営とその家訓をキメ細かく洗い出されたものであり、それによってわれわれは商業経営の実態をはじめて知ることができた。そのなかの『老舗の家訓と家業経営』が教授の学位請求論文であり、それにたいして経済学博士の学位が授与された。この学位請求論文となった『老舗の家訓と家業経営』は、足立教授のこれまでの研究のいわば集大成ともいえるべきものであり、三部全十章からなる尨大なものである。いま、その要点を摘記すれば次のようにまとめることができる。すなわち、京都室町商人の形成過程を元禄ノ享保期におき、その歴史的背景として西陣機業および地方機業の勃興・発展に求めながら、「近世前期の商人が特権的・依存的なものであったのに対して、新興の室町商人はより自主独立的」な性格をもっていたことを千吉商店、柏原商店、那波家江戸店などの家訓・店則・商法の分析によってみちびきだされている。そのさい、足立教授は経営方針、経営組織および経営意識の機能面まで立入るというこれまでの研究にみられなかった方法を駆使された。

いまみてきたように、足立教授の研究方法は一つの村あるいは個別経営の史料をたんに分析し、それを通してその時代の全体像とをかわり合わせて、時代像を明らかにするという特徴をもっており、それだけに貴重で

特異なものであるということが出来る。

四 希望と期待

『老舗の家訓と家業経営』は、新しい分析方法を駆使しながら、これまでほとんど未踏の領域を開拓された労作である。それは、学界においてよりもジャーナリズムで話題をよんだ。足立教授のテレビや講演活動が、本書の刊行をきっかけとして活発になった。学問はけっして象牙の塔のものでもなければ学界のものではない。それは、もともと社会とのつながりの中でのみ有効性をもつ。けれども、そのつながりが学問という世界を外れた場合には、学問の社会的責任とは無縁なものとなってしまう。私は足立教授がこの枠外に出られないよう希望して止まない。

足立教授に後進として期待したいことは、『近世在郷商人の経営史』というすぐれた実証分析から出発され『老舗の家訓と家業経営』という前人未踏の領域を開拓された営々たる研究過程をいま一度総合され、日本近世商業史を完成されることである。この仕事は、足立教授にしかやれない仕事であり、日本近世史研究者のみならず多くの経済史研究者が期待しているところでもある。

足立教授の益々の御健康と御活躍を御祈りする次第である。